

書評01

望月 衣塑子 著

『報道現場』

KADOKAWA/2021 年 10 月刊 /272 ページ /900 円+税
ISBN 978-4-040-82394-2

評者：池上 亜美

奈良女子大学大学院人間文化総合科学研究科博士前期課程



私たちが情報を得るための手段は変化しつつある。以前はラジオや新聞などが主な情報源であったが、現在はテレビだけでなくインターネットなどを通じた情報の入手が主な手段という人も多いのではないだろうか。特にインターネットを利用して情報を得る際は、掲載されている情報のソースはどこなのか、どのように入手された情報なのか、信頼できる情報なのか、吟味する必要がある。

全国大学生協連全国院生委員会が2020年秋に実施した「第11回全国院生生活実態調査」では、政治や社会の情報を入手する際によく利用するメディア（複数回答）として、「ニュースサイト・まとめサイト」（61.2%）の回答が最も多く挙げられた。また最も信頼がおけるメディアとしては、「ニュースサイト・まとめサイト」が26.9%、「テレビ」が19.0%、「Twitter」が13.9%を占める結果となった。大学院生であっても、政治や社会の情報に関して、自分から情報を得ようとする機会は少ないと考えられる。このような今だからこそ、メディアとの付き合い方を問い直す必要があるのではないだろうか。その際、情報源となる取材現場について目を向けることも、メディアについて考える際の有効な手段の一つである。

今回紹介する『報道現場』の著者・望月衣塑子氏は、東京新聞の記者である。官房長官時代の菅義偉氏との会見でのやり取りの印象が強いという人もいだろう。望月氏の著作である『新

聞記者』を原案とした、2019年公開の映画「新聞記者」が日本アカデミー賞最優秀作品賞を受賞したことも記憶に新しい。

本書は全部で七章の構成となっている。「男女平等や格差の是正、持続可能性……社会が大きな転換期を迎える中で、報道機関もそれまでの常識や取材方法を日々、アップデートすることが求められている。巨大な力を持つようになったSNSとの向き合い方も重要だ。そんな端境期にある取材現場について描いてみようと思った」と望月氏は述べる。取り上げた問題に関して丁寧な説明がなされており、政治や社会問題に関する知識がなくとも読み進めることができる。取材現場に目を向けることで、メディアについて考える際に参考になる書籍の一つとして本書を紹介させていただきたい。

第一章、第二章では実際の報道現場の様子が描かれ、取材方法の問題点などが指摘されている。第一章は「会見に出席できなくなった」と題し、首相官邸での菅氏の定例会見の様子から始まる。エスカレートする質問制限、他の記者からの同調圧力、記者と政治家の関係性……など、望月氏の実体験が鮮明に語られている。

第二章「取材方法を問い直す」では、権力者から情報を引き出し、取材を進めることで隠された事実を突き止める取材方法が紹介されている。具体例として、黒川検事長と記者らによって緊急事態宣言下で行われた「賭けマージャン事件」が取り上げられ、これまで記者の間では

当たり前とされていた取材方法ではいけないという、望月氏の危機感が示される。この章では、記者と市民の感覚の差が指摘されている点が非常に興味深い。記者の間では取材対象者との距離を縮めることで報道する事実をつかむことは当然のこととされるが、市民にとっては「記者は取材相手といつもこんなことをしているのか、このようにしてネタをとっているのか」というように感覚の違いがみられるという。

第三章以降では、メディアで大きく報じられた「日本学術会議問題」「日本オリンピック委員会 (JOC) の臨時評議員会森喜朗氏による女性蔑視発言」「名古屋出入国在留管理局に収容されていたスリランカ人女性、ウィシュマ・サンタマリさんの死亡」……などのトピックが盛り込まれている。紙幅の都合上、ここでは第五章と第六章を取り上げたい。

第五章「ジェンダーという視点」では、社会は男性優位の状況の中、男女平等に対する意識は、特に若い人を中心に日に日に高まっている、と望月氏は述べる。そのような社会変化を実感する代表的な出来事として、森喜朗氏による女性蔑視発言後の一連の騒動と自民党内の女性蔑視について紹介されている。

第六章では、外国人の労働問題に加えて、ビザの滞在期間が過ぎてしまった非正規滞在 (オーバーステイ) の外国人が収容される施設・地方出入国在留管理局 (入管) の問題が取り上げられている。フィリピン人女性・A さんとの出会いをきっかけに、外国人の労働問題を追っていたところに、名古屋出入国在留管理局に収容されていたウィシュマさんの死亡の話が飛び込んでくる。本書では、日本社会を支えるオーバーステイの労働者の存在、日本の入管における収容者への扱い、そしてウィシュマさんの死をめぐる法務大臣の対応などが記述されている。

第五章、第六章のみならず、第三章以降の各章に共通しているのは、報道によって私たち市民に問題提起がなされているということであ

る。森氏による女性蔑視発言問題もメディアによる指摘をきっかけに、SNS では抗議があふれ、テレビでもネットの怒りの渦に巻き込まれるかのように連日報道された。ウィシュマさんの死に関する一連の報道は、日本における外国人の労働問題、人権問題について考えるきっかけになったのではないだろうか。

先日、筆者はとある用事で出張の機会があり、手配された繁華街のホテルに宿泊した。フロントは外国人スタッフ一人きりで何人もの宿泊客の対応に追われていた。客室もホコリや髪の毛が目立ち、シャワールームは水垢だらけという空間で過ごさなければならなかった。全国旅行支援の影響でどこも満室であったため、悲惨なレビューが寄せられたこのホテルしか予約できなかったそう。この滞在を通して、現代社会における問題の一端が見えた気がした。雇用されていた外国人スタッフに対して、業務上の適切な教育も、労働に見合った賃金も、与えられていなかった可能性は考えられないだろうか。

「私たちの住む社会や政治が、民主主義というものを追い求める限りは、ジャーナリズムという機能は、必要不可欠だ」と望月氏が述べるように、媒体は変化しても事実を伝える・権力者の不正をチェックする機能は残り続ける。報道の取材方法や望月氏の意見に必ずしもすべてに賛同できるわけではないが、民主主義の中で権力者が隠したい事実に向き合い、オープンにする役割を担うメディアの存在は非常に重要だと考える。

市民側も報道内容の一面だけを見て信じるのではなく、報道による問題提起を受け止め、自ら考え、情報を多面的に捉えようとする努力が必要である。

いち市民として、社会の問題を知り知らせ、考え、話し合い、行動することの必要性を再認識するために参考となる一冊として、本書をおすすめしたい。